◆ [web 版資料31 エビデンスの収集と選定 CQ6 4-1~4-10, キーワードと文献, 推奨文草案]

※項目をクリックすると該当ページへとジャンプいたします

- 4-1_データベース検索結果 医中誌
- 4-1 データベース検索結果 Pubmed
- 4-2 文献検索フローチャート 1
- 4-2 文献検索フローチャート_2
- 4-2 文献検索フローチャート 3
- 4-3 二次スクリーニング後の一覧表 1
- 4-3 二次スクリーニング後の一覧表 _ 2
- 4-3_二次スクリーニング後の一覧表_3
- 4-4 引用文献リスト 1
- 4-4 引用文献リスト_2
- 4-4_引用文献リスト_3
- 4-5 評価シート介入研究
- 4-6_評価シート観察研究
- 4-7_エビデンス総体
- 4-8_定性的システマティックレビュー
- 4-9 メタアナリシス 1
- 4-9 メタアナリシス 2
- 4-10 SR レポートのまとめ
- キーワードと文献
- 推奨文草案

資料作成:日本痛風・核酸代謝学会 ガイドライン改訂委員会およびシステマティックレビューチーム

本資料を無断で、複製、転用などする事を禁じます. なお、資料の内容を雑誌、書籍、CD-ROM等へ転載、掲載する場合は、事前に 一般社団法人 日本痛風・核酸代謝学会へご連絡ください.

[©]一般社団法人 日本痛風・核酸代謝学会, 2018.

4-1_データベース検索結果 医中誌

【4-1 データベース検索結果】

タイトル 急性痛風⑥

CQ 痛風発作が頻発する患者において、コルヒチンカバーを長期間使用することは短期間使用することに比して推奨できるか

データベース 医中誌 日付 2017/3/3

No.	検索式	検索件数	
#01	高尿酸血症/TH and (SH=治療)	444	1
#02	痛風/TH and (SH=治療)	409	
#03	(高尿酸血症/TA or 尿酸過剰血症/TA or 痛風/TA or 尿酸結晶沈着症/TA) and (治療/TA or 療法/TA or 予防/TA)	3,352	
#04	Colchicine/TH	1,728	
#05	colchicine/TA or コルヒチン/TA or demecolcine/TA or デメコルシン/TA or Lumicolchicine/TA or ルミコルヒチン/TA	1,486	
#06	(#1 or #2 or #3) and (#4 or #5)	182	
#07	#6 and (メタアナリシス/TH or システマティックレビュー/TH)	0	
#08	#6 and (RD=メタアナリシス)	0	
#09	#6 and (メタアナリシス/TA or システマティックレビュー/TA)	0	
#10	#6 and 診療ガイドライン/TH	41	
#11	#6 and (RD=診療ガイドライン)	2	
#12	#6 and 診療ガイドライン/TA	4	
#13	#10 or #11 or #12	42	Sh
#14	#6 and ランダム化比較試験/TH	6	
#15	#6 and (RD=ランダム化比較試験)	0	
#16	#6 and (ランダム化比較試験/TA or 無作為化比較試験/TA)	2	
#17	(#14 or #16) not #13	6	Sh
#18	#6 and (疫学研究特性/TH or 疫学的研究デザイン/TH)	10	
#19	#6 and (RD=準ランダム化比較試験,比較研究)	0	
#20	(#18 or #19) not (#13 or #17)	4	Sh

4-1_データベース検索結果 Pubmed

【4-1 データベース検索結果】

タイトル 急性痛風⑥

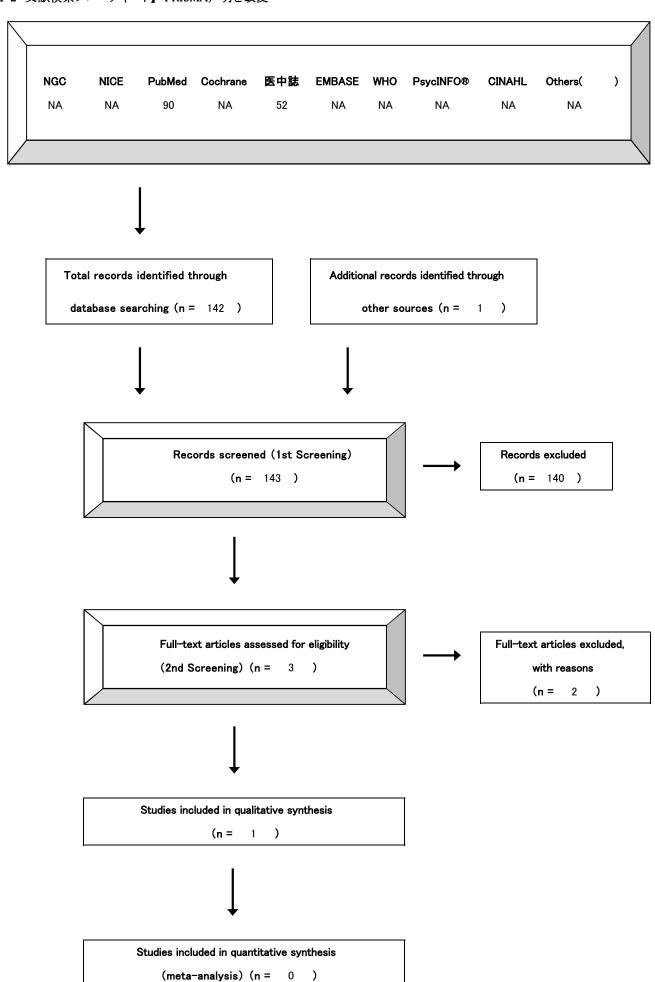
CQ 痛風発作が頻発する患者において、コルヒチンカバーを長期間使用することは短期間使用することに比して推奨できるか

データベース Pubmed 日付 2017/3/3

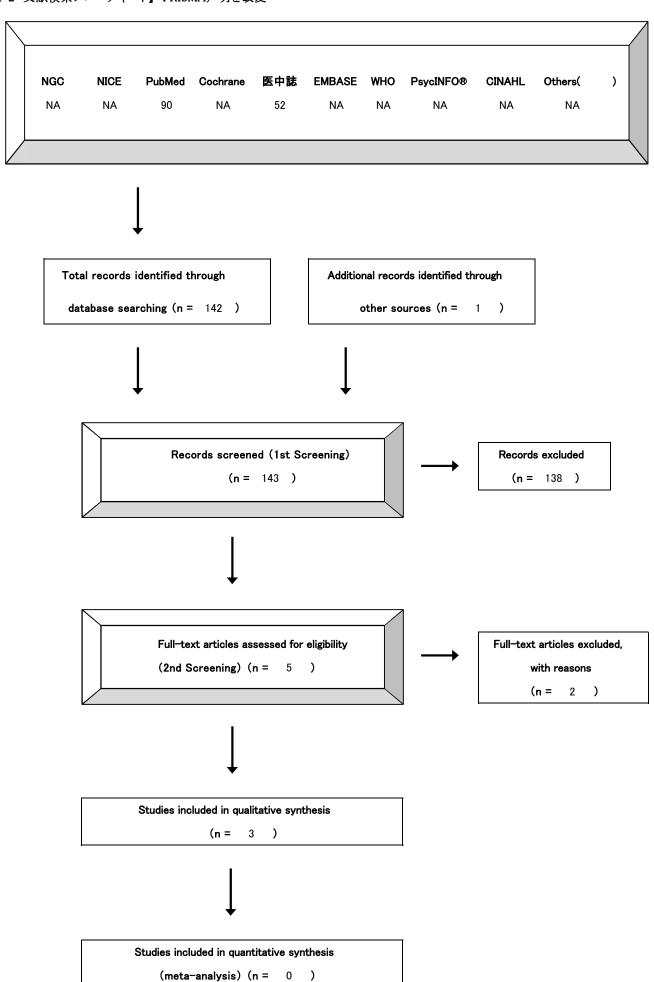
No.	検索式	検索件数
#01	"Hyperuricemia/therapy"[MH]	811
#02	(hyperuricemia*[TIAB] OR hyperuricaemia*[TIAB] OR hyperuricemic*[TIAB] OR hyperuricaemic*[TIAB]) AND (therap*[TIAB] OR treatment*[TIAB] OR chemotherap*[TIAB] OR pharmacotherap*[TIAB] OR prophylaxis[TIAB] OR precautionary[TIAB] OR preventi*[TIAB] OR prophylactic*[TIAB])	2,780
#03	"Gout/therapy"[MH]	3,840
#04	(gout[TIAB] OR gouty[TIAB]) AND (therap*[TIAB] OR treatment*[TIAB] OR chemotherap*[TIAB] OR pharmacotherap*[TIAB] OR prophylaxis[TIAB] OR precautionary[TIAB] OR preventi*[TIAB] OR prophylactic*[TIAB])	4,241
#05	"Colchicine/administration and dosage"[MH]	824
#06	"Colchicine/adverse effects"[MH]	1,148
#07	"Colchicine"[MH]	14,315
#08	(colchicine*[TIAB] OR demecolcine[TIAB] OR lumicolchicine*[TIAB]) AND ("Gout Suppressants"[MH] OR "Gout Suppressants"[PA])	9,125
#09	"Drug Administration Schedule"[MH]	92,883
#10	(colchicine*[TIAB] OR demecolcine[TIAB] OR lumicolchicine*[TIAB]) AND (administration*[TIAB] OR adverse effect*[TIAB] OR adverse event*[TIAB])	1,090
#11	(#1 OR #2 OR #3 OR #4) AND (#5 OR #6 OR ((#7 OR #8) AND #9) OR #10)	360
#12	#11 AND (JAPANESE[LA] OR ENGLISH[LA])	308
#13	#12 AND ("Meta-Analysis"[PT] OR "meta-analysis"[TIAB])	5
#14	#12 AND ("Cochrane Database Syst Rev"[TA] OR "systematic review"[TIAB])	14
#15	#12 AND ("Practice Guideline"[PT] OR "Practice Guidelines as Topic"[MH] OR (guideline*[TIAB] NOT medline[SB]))	13
#16	#13 OR #14 OR #15	27
#17	#12 AND ("Randomized Controlled Trial"[PT] OR "Randomized Controlled Trials as Topic"[MH] OR (random*[TIAB] NOT medline[SB]))	30
#18	#12 AND ("Clinical Study"[PT] OR "Clinical Studies as Topic"[MH] OR ((clinical trial*[TIAB] OR observational stud*[TIAB]) NOT medline[SB]))	46
#19	(#17 OR #18) NOT #16	41
#20	#12 AND ("Epidemiologic Studies" [Mesh] OR "Epidemiologic Research Design" [MH] OR "Comparative Study" [PT] OR "Multicenter Study" [PT] OR ((cohort stud*[TIAB] OR comparative stud*[TIAB] OR follow-up stud*[TIAB] OR case control*[TIAB]) NOT medline [SB]))	46
#21	#20 NOT (#16 OR #19)	23

Wortmann RL, 2010 / Borstad GC, 2004

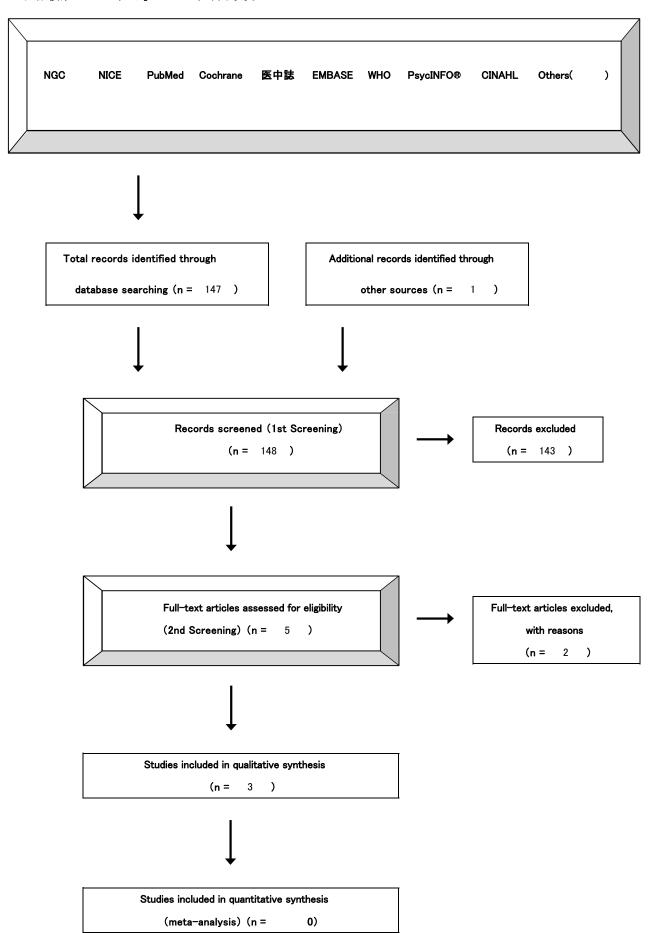
【4-2 文献検索フローチャート】 PRISMA声明を改変



【4-2 文献検索フローチャート】 PRISMA声明を改変



【4-2 文献検索フローチャート】 PRISMA声明を改変



4-3_二次スクリーニング後の一覧表_1

【4-3 二次スクリーニング後の一覧表】CQ6(QOLが改善する)

文献	研究デザイン	Р	I	С	0	除外	コメント
Borstad, GC et al. 2004	RCT	証明された19歳以	コルヒチン0.6mg経 ロ、1日2回を6ヶ月 間投与(21例)		コルヒチン群では全体で発作は有意に 少なく(0.52対 2.91)、3-6ヶ月でより少ない(0対 1.05)。VASで発作の程度を比較しコル ヒチン群で軽かった (3.64対5.08)		
Krimzadeh, H et al. 2006	RCT	過し,尿酸降下療法 の適応のある痛風	コルヒチン1mg/日を 投与。投与期間をラ ンダムに3群(3-6ヶ 月、6-9ヶ月、9-12ヶ 月)に割り付け	ループ1)、7-9月投 与グループ2)、10-	ループ1)、27.5%(グ ループ2)、23%(グ ループ3)。		プラセボの対照なし。バイ アスリスクとなる可能性が ある。
Wortmann, R.L. et al. 2010	3つのRCT	タットの第3相試験 (FACT 760名、 APEX 1072		ではナプロキセン 250mg1日2回を8週 間 CONFIRMSではナ プロキセン250mg1	20%。短期投与群 (FACT、APEX)で	改善 のアウ トカム の記	

4-3_二次スクリーニング後の一覧表_2

【4-3 二次スクリーニング後の一覧表】CQ6(痛風発作が予防される)

文献	研究デザイン	Р	I	С	0	除外	コメント
Borstad, GC et al. 2004	RCT	43名の尿酸結晶の 証明された19歳以 上の痛風患者	コルヒチン0.6mg経 口、1日2回を6ヶ月 間投与(21例)	プラセボ (22例)	コルヒチン群では全体で発作は有意に少なく(0.52対2.91)、3-6ヶ月でより少ない(0対1.05)。		
Krimzadeh, H et al. 2006	RCT	発症後1年以上経 過し,尿酸降下療 法の適応のある痛 風患者229名、全 例をアロプリール で治療。190名が 全期間を終了。	投与。投与期間をランダムに3群(3-6ヶ月、6-9ヶ月、9-12ヶ				プラセボの対照なし。バイ アスリスクとなる可能性が ある。
Wortmann, R.L. et al. 2010	3つのRCT	タットの第3相試験 (FACT 760名、 APEX 1072	FACT、APEXではコ ルヒチン0.6mg/日を 8週間 CONFIRMSではコ ルヒチン0.6mg/日を 6ヶ月	ではナプロキセン 250mg1日2回を8週 間 CONFIRMSではナ	3群ともコルヒチン投 与中の発作は10- 20%。短期投与群 (FACT、APEX)では 8週終了後発作が 40%に増加。長期投 与群(CONFIRM)6ヶ 月まで漸減。		
Paulus HE, et al. 1974	RCT	51例(ロサンジェル ス28例、カンザスシ ティ23例)の痛風患 者		プラセボ (12+11= 23例)	コルヒチン1.5mgを 服用できた20例の 発作率2.3回/年、プ ラセボ18例の発作 率6回/年。	CQに 合致し ない	
Sclesinger N, et al. 2011	RCT	432例の痛風患者。 Canakinumabの有 用性をコルヒチンを 対照に比較	コルヒチン0.5mg	canakinumab6種類 の投与法	コルヒチン投与に比 べてどの投与法で canakinumabが有用	合致し	

4-3_二次スクリーニング後の一覧表_3

【4-3 二次スクリーニング後の一覧表】

文献	研究デザイン	Р	I	С	0	除外	コメント
Borstad, GC et al. 2004	Clinical trial	43名の尿酸結晶の証明された 19歳以上の痛風患者(過去3ヶ 月にコルヒチン投与を受けた、 コルヒチンもしくはアロプリノー ルに過敏症、妊娠可能な女性、 重度の腎不全は除外)		なし	コルヒチンは忍容性があった。		単一の治療群を3ヶ月、6ヶ月の時点で評価したもので、実際の投与期間に差は無い。
Krimzadeh, H et al. 2006	RCT	発症後1年以上経過し,尿酸降 下療法の適応のある痛風患者 229名、全例をアロプリノールで 治療。190名が全期間を終了。	期間をランダムに3群(3-6ヶ月、	なし	3群間で有害事象に差は無かっ た。		プラセボの対照なし。バイアスリスクとなる可能性がある。
Wortmann, R.L. et al. 2010	3つのRCT			なし、FACT、APEXではナプロ キセン250mg1日2回を8週間 CONFIRMSではナプロキセン 250mg1日2回を6ヶ月間	短期投与群と 長期投与群では全体の有害事 象に差は無かった。		Wortmann らのデータをもちいて SRチームが独自に個々の有害 事象について検討した所、長期 投与群で肝障害の頻度が高 かった。
Shekelle, P.G. et al. 2016						CQに 合致し ない	
Seth, R. et al. 2014						CQに 合致し ない	

4-4_引用文献リスト_1

【4-4 引用文献リスト】CQ6(QOLが改善する)

採用論文	1. Borstad, GC et al. 2004	1. Colchicine for prophylaxis of acute flares when initiating allopurinol for chronic gouty arthritis. J Rheumatol. 31(12): 2429–2432.
不採用論文	 Karimzadeh, H et al. 2006. Wortmann, RL et al. 2010. 	 Different duration of Colchitine for preventing recurrence of Gouty arthritis. J. Res. Med.Sci. 11(2): 104–107. Effect fo prophylaxis on gout flares after the initiation of urate-lowering therapy: Analysis of data from three phase III traials. Clin Therap. 32(14): 2386–2397.
その他の 引用論文		

4-4_引用文献リスト_2

【4-4 引用文献リスト】CQ6(痛風発作が予防される)

	1. Borstad, GC et al. 2004	1. Colchicine for prophylaxis of acute flares when initiating allopurinol for chronic gouty arthritis. J Rheumatol. 31(12): 2429-2432.
採用論文	2. Karimzadeh, H et al. 2006.	2. Different duration of Colchitine for preventing recurrence of Gouty arthritis. J. Res. Med.Sci. 11(2): 104-107.
	3. Wortmann, RL et al. 2010.	3. Effect fo prophylaxis on gout flares after the initiation of urate-lowering therapy: Analysis of data from three phase III traials. Clin Therap. 32(14): 2386-2397.
	1. Paulus HE, et al. 1974	Prophylactic colchicine therapy of intercritical gout. A placebo- controlled study of probenecid-treated patients. Arthritis Rheumatism 17(5) 609-614.
不採用論文	2. Sclesinger N, et al. 2011	Canakinumab reduces the risk of acute gouty artthritis flares during initiation of akkourinol treatment: result of a double-blind, randomized study. Ann Rheum Dis 70:1264-1271.
その他の引用論文		

4-4_引用文献リスト_3

【4-4 引用文献リスト】

採用論文	 Borstad, GC et al. 2004 Karimzadeh, H et al. 2006. Wortmann, RL et al. 2010. 	1. Colchicine for prophylaxis of acute flares when initiating allopurinol for chronic gouty arthritis. J Rheumatol. 31(12): 2429–2432. 2. Different duration of Colchitine for preventing recurrence of Gouty arthritis. J. Res. Med.Sci. 11(2): 104–107. 3. Effect fo prophylaxis on gout flares after the initiation of urate-lowering therapy: Analysis of data from three phase III traials. Clin Therap. 32(14): 2386–2397.
不採用論文	 Seth, R et al. 2014. Shekelle, PG et al. 2017. 	Preventing attacks of acute gout when introducing urate-lowering therapy: A systematic literature review. J. Rheumatol 41(suppl 92): 42-47. Management of gout: A systematic review in support of an American College of Physician clinical practice guideline. Ann. Int. Med. 166: 37-51
その他の 引用論文		

4-5_評価シート介入研究

【4-5 評価シート 介入研究】

診療ガイドライン	痛風発作に対するコルヒチンの長期予防投与で有害事象が増加するか
対象	ULT療法中の痛風患者
介入	コルヒチンの長期予防投与
対照	コルヒチンの短期予防投与

* 各項目の評価は"高(-2)"、"中/疑い(-1)"、"低(0)"の3段階 まとめは"高(-2)"、"中(-1)"、"低(0)"の3段階でエビデンス総体に反映させる

各アウトカムごとに別紙にまとめる

アウ	トカム		コルヒチンの	長期予防投		が増加する	か																		
個別	川研究	選択/	ベイアス	パイアスリスク* 実行パイア ス		症例減少パイアス			その他				非直	接性*				ļ	ノスク人数(アウトカム率)				
研究コード	研究デザイン	ランダム化	コンシールメント	盲検化	盲検化	пт	アウトカム 不完全報 告	選択的アウトカム報告	早期試験中止	その他のバ イアス	まとめ	対象	介入	対照	アウトカム	まとめ	対照群分 母	対照群分 子	(%)	介入群分 母	介入群分 子	(%)	効果指標 (種類)	効果指標 (値)	信頼区間
Karimzadeh 2006, G-1 vs G-2	RCT	-1	-2	-2	-2	0	0	0	0	-2	-2	0	0	0	0	0	63	3	4.8	62	5	8.1	RR	1.694	0.42-6.78
Wortmann 2010	RCT	0	0	0	0	0	0	0	0	-1	0	-1	-1	-1	-1	-1	993	25	2.5	1897	140	7.7	RR	3.0831	2.03-4.68
コメント(該当するセル	/に記入) 	1	1	1	1	1	1				I	1	1		1	1	1	 			1	I	T	1	T
													用量が日 本と異なる (1mg/日)。												両側P値=0.49147 片側P値=0.34977
	3つのRCTのpost hoc 解析												用量が日 本と異なる (0.6mg/ 日)。												両側P値=0.00000 片側P値=0.0000
1																									

4-6_評価シート観察研究

【4-6 評価シート 観察研究】

診療ガイドライン	高尿酸血症·痛風治療
対象	痛風
介入	コルヒチン
対照	投与期間による

*バイアスリスク、非直接性 各ドメインの評価は"高(-2)"、"中/疑い(-1)"、"低(0)"の3段階 まとめは"高(-2)"、"中(-1)"、"低(0)"の3段階でエビデンス総体に反映させる ** 上昇要因 各項目の評価は"高(+2)"、"中(+1)"、"低(0)"の3段階 まとめは"高(+2)"、"中(+1)"、"低(0)"の3段階でエビデンス総体に反映させる 各アウトカムごとに別紙にまとめる

	アウトカム		長期投	:与によって有	害事象が増た	加するか																				
				パイア	スリスク*																					
	個別研究			検出パイアス			の他			上昇要因**			非直接性*					リスク人数(アウトカム率)								
研究コー	・ド 研究デザイン	背景因子 の差	ケアの差	不適切なア ウトカム測 定	不完全な フォロー アップ	不十分な交 絡の調整	その他のバ イアス	まとめ	量反応関係	効果減弱 交絡	効果の大き	まとめ	対象	介入	対照	アウトカム	まとめ	対照群分 母	対照群分 子	(%)	介入群分 母	介入群分 子	(%)	効果指標 (種類)	効果指標 (値)	信頼区間
Borstad, G al. 200	Get コホート研究	0	0	-2	0	-1	-2	-2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	NA	NA	NA	43	43				

コメント(該当するセルに記入)

前向きコホート研究		アウトカム 測定記録の 記載なし								コルヒチンは 忍容性があっ たとのみ記 載。 単一の治療群を3ヶ 月、6ヶ月の時点で評 価したものである。

4-7 エビデンス総体

【4-7 評価シート エビデンス総体】

	痛風発作が頻発する患者において、コルヒチンカバーを長期間使用することは
診療ガイドライン	短期間使用することに比して推奨できるか?
対象	尿酸降下療法中の痛風患者
介入	尿酸降下療法開始時の発作予防のためのコルヒチンの長期予防投与
対照	尿酸降下療法開始時の発作予防のためのコルヒチンの短期予防投与

エビデンスの強さはRCTは"強(A)"からスタート、観察研究は弱(C)からスタート* 各ドメインは"高(-2)"、"中/疑い(-1)"、"低(0)"の3段階** エビデンスの強さは"強(A)"、"中(B)"、"弱(C)"、"非常に弱(D)"の4段階*** 重要性はアウトカムの重要性(1~9)

リスク人数(アウトカム率) エビデンス総体

							7												
アウトカム	研究デザイン/研究数	バイアスリ スク*	非一貫性*	不精確*	非直接性*	その他(出 版バイアス など)*	上昇要因 (観察研 究)*	対照群分 母	対照群分 子	(%)	介入群分 母	介入群分 子	(%)	効果指標 (種類)	効果指標 統合値	信頼区間	エビデンス の強さ**	重要性***	コメント
コルヒチンの長期予 防投与は短期予防投 与と比較して有害事 象が増加するか	RCT/2	-1	-1	0	0	0	0	1056	28	2.65	1869	145	7.76	RR	2.93	1.96-4.37	中(B)	7	1つのRCTで3群に分けたうち 2群間でのみ比較し、また2つ ののRCT間で投与期間が異 なる。
コルヒチンの長期予 防投与は短期予防投 与と比較して発作が 予防される	RCT/2	-1	0	0	-2	-1		1886	1241	65.8	2330	2223	95.4	RR	1.45	1.40-1.52	弱(C)	7	1つのRCTは、3つのRCTを2 群に分けて比較。また、痛風 発作予防にNSAIDsも含まれ ている。
コルヒチンの長期予防投与は短期予防投与は短期予防投与と比較してQOLが改善される	RCT/1	-1	0	-2	-2	-1		22		5.08 (mean)	21		3.64 (mean)	MD	-1.44		非常に弱 (D)	5	コルヒチンとプラセボの試験 であり、長期間/短期間コルヒ チン投与を比較したものでは ない。QOLをアウトカムとする 研究が存在せず、VASで代 替。
							_												

コメント(該当するセルに記入)

有害事象として2つの RCTに共通して取り上 げている肝障害で比 較した。	RCTは2つであるが、1 つのRCTを3つの比較 とした									両側P値 =0.00000,片 側P値 =0.00000		
痛風発作が予防され る	RCTは2つであるが、1 つは3つのRCTを2群 に分けて比較した。											
QOLが改善する					プラセボ	平均VAS	コルヒチン	平均VAS				
											·	
									·	·		

4-8 定性的システマティックレビュー

【4-8 定性的システマティックレビュー】

_		_	· ·							
С	Q	CQ-6	痛風発作が頻発する患者において、コルヒチンカバーを長期間使用することは短期間使用することに比して推奨できるか?							
Р	尿酸隆	降下療法中の	痛風患者							
I	尿酸降下療法中の痛風患者にみられる痛風発作の予防のために、コルヒチンの長期投与をあわせて行うことが推 奨できるかを有害事象の出現の面から検討する。									
С	コルヒチンの短期予防投与と長期予防投与での有害事象として肝機能障害の出現率(3-6ヶ月と7-9ヶ月、8週間と 6ヶ月)を比較する。									
	臨床的	勺文脈	尿酸降下療法中の痛風発作の予防							
	0	1	尿酸降下療法中の痛風発作の予防のための、コルヒチンの長期投与は短期投与と比べて有害事象 (肝機能障害)の頻度が増加するか							
非	直接性	のまとめ	薬剤の投与量、投与期間が2つのRCT間で異なっているが、他の項目に非直接性はない。							
×	イアス まと	リスクの :め	1論文で選択バイアス、実行バイアス、検出バイアスに深刻なリスクあり。							
非	一貫性 まと	その他の :め	2つのRCT間で一部アウトカムの詳細な内容が異なっており、有害事象として肝機能障害のみをとりあげた。							
	크メ	ント	1論文で肝機能障害はコルヒチンの投与期間で差はみられなかったが、バイアスリスクが高く、もう一方の3つのRCTからのPos hoc試験では、短期投与と長期投与を比較すると、長期投与で肝障害の頻度は高くなったが、他の有害事象全般では有害事象に差はみられなかった。							
	0	2								
	0	3								

4-9 メタアナリシス_1

【4-9 メタアナリシス】

	CQ	コルヒチンの長期投与に、	よって有害事	象 (肝機能障害)が増	加するか?	
P	尿酸降下療法を受けている痛風患者			ī	コルヒチン投与	
C	コルヒチンの短期予防投与と長期予防投与	での有害事象(肝機能障害)の	の頻度	0	有害事象(肝機能障害)が増加 有害事象(肝機能障害)が増加	する?
	研究デザイン	RCT	文献数	2	コード	Karimzadeh 2006, Wortmann 2010
	モデル	ランダム効果		方法	Inverse-variance method (Re	evMan 5.3)
	効果指標	リスク比		統合値	2. 93 (1. 96-4. 37) P<0. 00001	
	Forest plot	Study or Subgroup Ever Karimzadeh Wortmann Total (95% CI) Total events Heterogeneity: Tau ² - 0.0 Test for overall effect: Z -	145 0; Chi² - 0.65 5.26 (P < 0.00 0 長期予防投 ²	3 63 8.3% 25 993 91.7% 1056 100.0% 28 . df - 1 (P - 0.42); I² - 2001) ラで有害事象としての	0.01	Favours Long term Favours Short term 高くなるが、Wortmannら2010の研究結果による
	Funnel plot	- o - storico - o - o - o - o - o - o - o - o - o -	スを示唆するな	分布は認められない。		
	その他の解析	施行せず。				コメント:
	メタリグレッション 感度分析					有意水準に達する。

4-9 メタアナリシス_2

【4-9 メタアナリシス】

CQ		痛風発作が頻発する患者 推奨されるか?	こ長期間コルヒ	ニチンカ	バーを行うこん	とは短期間	コルヒチンカバー	-を行うよりも
Р	痛風患者			I	長期間コルヒ	チンカバー	-	
С	短期間コル	ヒチンカバー		0	痛風発作が	予防される		
क्ताः	究デザイン	RCT	文献数	2	コード			
	モデル	ランダム効果	方法		Inverse-varia	ance metho	d (RevMan5.3)	
交	効果指標	リスク比	統合値	İ	1.45 (1.40 -	1.50) P=	0.00001
Fo	orest plot		2 29 63 8 1212 1823 0 1886 1241 31, df = 1 (P = 0.58)	1.2% 98.8% 100.0%	Risk Ratio IV, Random, 95% C 1.58 [1.16, 2.15] 1.44 [1.40, 1.49] 1.45 [1.40, 1.50]] 2005] 2010	Risk Ratio IV, Random, 95 0.1 Favours long Favo	10 100
Fu	unnel plot	0.05- 0.15- 0.15- 0.30-1 0.17- 0.17	1 RI 10 1	3,000				
その	の他の解析	施行せず					コメント:	
メタリ シ:	グレッ ヨン 分析							

【4-10 SR レポートのまとめ】

CQ-6 コルヒチンの短期投与と長期投与-痛風発作が予防される?

痛風関節炎、いわゆる痛風発作は尿酸降下薬の投与開始時など、血清尿酸値の 急激な変動時にみられやすい。ことに欧米では尿酸降下薬の1錠当たりの含有量が 我が国と異なり多いため(フェブキソスタット40~60mg:10mg)、治療開始時に痛風発 作が誘発される可能性が高い。多くの研究者によって尿酸降下薬開始時には NSAIDs やコルヒチンの予防投与(コルヒチンカバー)が勧められてきたが、痛風関節 炎の予防のためのコルヒチンの投与期間については明確な基準はなく、長期予防投 与と短期予防投与の有効性について比較・検討した研究は少ない。

Karimzadeh らの研究においてコルヒチン1mg/日3~6か月投与を短期投与群として7~9か月投与を長期投与群として比較すると、短期投与群では63例中34例(54%)に痛風発作が起こっていたが、長期投与群では62例中17例(27.4%)と痛風発作の頻度は半減し、さらに10~12か月投与においても痛風発作頻度は7~9か月と同等であったことから、コストベネフィットも考慮してコルヒチンの予防投与は7~9か月が望ましいとしている(1)。

事後解析のデータではあるが、Wortmann らは3つの PhaseⅢのトライアル (FACT、APEX、CONFIRMS)でコルヒチンと NSAIDs の予防投与の有効性を比較・検 討している(2)。FACT と APEX はコルヒチン0.6mg を1日2回あるいはナプロキセン 250mgを1日2回で8週間投与、CONFIRMS では同薬を6か月投与しているため、スコ ープ担当者と SR チームが相談の上、前者を短期投与群、後者を長期投与群として FACTとAPEXでは予防投与中止直後の8~12週、CONFIRMSでは予防投与中止直 後の24~28週における痛風発作の頻度を比較することとした。Wortmann らは血清尿 酸値6.0mg/dl 未満達成者と未達成者別に痛風発作頻度を検討しているが、それぞれ のトライアルにおける達成率を原文に記載されている FACT45.3%(3)、APEX42.7%(4)、 CONFIRMS45.4%(5)として痛風発作人数を算出した。FACT と APEX の短期投与群で は1823例中611例(33.5%)に痛風発作が起こっているのに対して CONFIRMS の長期 投与群では2268例中痛風発作は90例(4%)に過ぎず、コルヒチンの予防投与は8週で は短すぎ6か月が望ましいと考えられる。この検討では予防投与がコルヒチンだけで なくナプロキセン投与が含まれていることから厳密にはコルヒチンカバーと言い切れな いところが問題ではある。また、それぞれのトライアルにおけるフェブキソスタット投与 量が FACT では80mg、120mg、APEX では80mg、120mg、240mg と CONFIRMS の 40mg、80mgに比較して投与量が多いこともバイアスとなる可能性がある。

この2つの検討とは別に慢性痛風患者を対象として血清尿酸値6.5mg/dl 未満を目標にしたアロプリノール治療に際して、コルヒチン0.6mgを1日2回投与する群とプラセボ投与群で6か月間の痛風発作頻度を比較した Borstad らの研究がある(6)。プラセボ群22例では痛風発作が6か月間で65回起こったのに対してコルヒチン投与群21例では12回に過ぎず、これを0~3か月と3~6か月に分けて検討するとコルヒチン投与群の痛風発作はアロプリノール漸増時期の0~3か月に全て起こっており、治療目標値達成後の3~6か月では皆無であった。尿酸の治療目標値達成後3か月はコルヒチンの予防投与は必要で治療開始時からでは6か月投与が望ましいとしている。この研究はコルヒチンの予防投与の有効性を検討する無作為化対照比較試験ではあるが、同

一の対象で短期投与と長期投与を比較しており、Karimzadeh らや Wortmann らの検討とは同一に比較できないため、メタ解析からは除外したが、コルヒチンカバーの期間を考える上で貴重な論文と考え追記した。

参考文献

- (1) Karimzadeh H, Nazari J, Mottaghi P, et al. Different duration of colchicines for preventing recurrence of gouty arthritis. J Res Med Sci 2006; 11(2): 104-107.
- (2) Wortmann RL, MacDonald PA, Hunt B, et al. Effect of prophylaxis on gout flares after the initiation of urate-lowering therapy: analysis of data from three phase III trials. Clin Ther 2010; 32(14): 2386-2397.
- (3) Becker MA, Schumacher HR Jr, Wortmann RL, et al. Febuxostat compared with allopurinol in patients with hyperuricemia and gout. N Engl J Med 2005; 353:2450-2461.
- (4) Schumacher HR Jr, Becker MA, Wortmann RL, et al. Effects of febuxostat versus allopurinol and placebo in reducing serum urate in subjects with hyperuricemia and gout: s 28-week, Phases III, randomized, double-blind, parallel-group trial. Arthritis Rheum. 2008;59:1540-1548.
- (5) Becker MA, Schumacher HR, Espinoza LR, et al. The urate-lowering efficacy and safety of febuxostat in the treatment of the hyperuricemia of gout: the CONFIRMS trial.Arthritis Res Ther. 2010;12:R63.
- (6) Borstad GC, Bryant LR, Abel MP, et al. Colchicine for prophylaxis of acute flares when initiating allopurinol for chronic gouty arthritis. J Rheumatol 2004; 31(12): 2429-2432.

CQ-6 コルヒチンの短期投与と長期投与-QOL が改善する?

痛風関節炎、いわゆる痛風発作は尿酸降下薬の投与開始時など、血清尿酸値の 急激な変動時にみられやすい。ことに欧米では尿酸降下薬の1錠当たりの含有量が 我が国と異なり多いため(フェブキソスタット40~80mg:10mg)、治療開始時に痛風発 作が誘発される可能性が高い。多くの研究者によって尿酸降下薬開始時には NSAID やコルヒチンの予防投与(コルヒチンカバー)が勧められてきたが、コルヒチンの投与 期間については明確な基準はなく、長期予防投与と短期予防投与の有効性について 比較・検討した研究は少ない。ことに、QOL に言及した前向きな二重盲検対称比較試 験は皆無であった。コルヒチンカバーを行うことで痛風発作の重症度を(ビジュアル・ アナログ・スケール: VAS)で比較した Borstad らの研究(1)を QOL の代替としようと 考えたが、尿酸降下療法開始6か月間で VAS はコルヒチン投与群が3.64でプラセボ 対照群の5.08より軽度であったとの結果が報告されているのみであり、投与期間の是 非を判定することはできなかった。この論文はアロプリノールを100mg から漸増するわ が国と同様の方法で尿酸降下療法が行われているが、試験前1年間の発作回数が 2.09~2.48と比較的多い慢性痛風患者を対象としているからか、アロプリノールを最 小量の100mg で治療を開始してもプラセボ群では0~3か月にコルヒチン投与群と比 較すると5倍強発作が起こっている。年間2回以上の痛風発作を起こすような慢性痛 風患者では最小量の尿酸降下薬で治療を開始する場合にもコルヒチンカバーは有用 と考えられる。

参考文献

(1) Borstad GC, Bryant LR, Abel MP, et al. Colchicine for prophylaxis of acute flares when initiating allopurinol for chronic gouty arthritis. J Rheumatol 2004; 31(12): 2429-2432.

CQ-6 コルヒチンの短期投与と長期投与 - 有害事象が増加する?

痛風関節炎、いわゆる痛風発作は尿酸降下薬の投与開始時など、血清尿酸値の急激な変動時にみられやすい。そのため、多くの研究者によって尿酸降下薬の投与開始時にはNSAID、コルヒチン、ステロイドの併用が奨められてきた。

痛風関節炎の予防のためのコルヒチンの投与期間については明らかに定義されていないが、最後の痛風発作が起こってから、3ヶ月[1]、6ヶ月[2]、1年以上[3,4]などという報告がみられる。しかしながらコルヒチンの長期予防投与と短期予防投与の有効性(発作回数が減少する、QOL が改善する)について比較・検討した研究は少なく、さらに有害事象の多寡について統計学的に比較検討した研究にいたってはほとんどみられない。

Borstad GC, et al による前向き二重盲検プラセボ対照試験[5]では、コルヒチン、0.6mg×1~2回の投与は忍容性があると記載されているが、0~3 $_{7}$ 月の短期予防投与群と3~6 $_{7}$ 月の長期予防投与群の間での有害事象の差については言及していない。

Karimzadeh らの研究によると、正常値の2倍以下の肝酵素 (GOT, GPT)の上昇は、コルヒチン3~6ヶ月投与群で63名中3名 (4.8%)、7~9ヶ月投与群で62名中5名 (8.1%)、10~12ヶ月投与群で65名中6名 (9.2%)にみられたが、いずれも一過性で、コルヒチン継続にても正常化し、3群間で有意差はみられなかった (p=0.2) [6]。この研究の問題点としては、プラセボグループが設定されていないこと、バイアスの危険性が高いことが挙げられる。

事後解析のデータではあるが、3つの Phase III のトライアル (FACT、APEX、CONFIRM)でコルヒチンと NSAID による有害事象についての比較・検討がみられる[7]。 FACT、APEX におけるコルヒチンの8週間投与 (短期予防投与)による有害事象は993名中547名 (55.1%)にみられ、一方、CONFIRM でのコルヒチンの6ヶ月投与 (長期予防投与)による有害事象は1807名中996名 (55.1%)と、有害事象全般に変化はみられなかった。しかし、個々の有害事象で最も多かったのは上気道感染で、コルヒチン短期投与群 (FACT、APEX)で993名中90名 (9.1%)、コルヒチン長期投与群 (CONFIRM)で1807名中93名 (5.1%)であった。スコープ担当者と SR チームが独自に行った個々の有害事象についての差についての検討 (オリジナル論文ではコルヒチンとナプロキセンの有害事象の頻度を、それぞれ短期投与群と長期投与群で行っている)では、表に示すように長期投与群で肝機能障害の頻度が高くなっているが、下痢、関節関連症状、頭痛、嘔気・嘔吐などの頻度は、むしろ短期投与群で有意に高かった。

以上の研究成績から、コルヒチンの短期投与でも長期投与でも有害事象全般に有意な差はみられない可能性がある。ただ肝機能障害の頻度については Karimzadeh H, et al の研究ではバイアスリスクが大きいものの、短期投与と比べて長期投与で1.69倍、また Wortmann RL, et al の研究から得られたデータでは3.08倍との結果であり、これら2つの RCT によるメタ解析では、コルヒチン長期投与による肝機能障害の頻度は短期投与と比較して有意に高値である (RR=2.93信頼区間 1.96-468)が、funnel plot を行うには RCT 数があまりにも少なく、また肝機能障害以外の有害事象についても、今後の RCT の蓄積による結果を待たなければならない。

短期投与群 (8週間) 長期投与群 (6ヶ月)

FACT, APEX CONFIRM P値 (n= 993) (n=1807)

副作用全般 547 (55.1%) 996 (55.1%) NS

上気道感染	90 (9.1%)	150 (5.1%)	NS
下痢	83 (8.4%)	93 (5.1%)	0.000
筋・関節・結合	治 維症状 57(5.7%)	94 (5.2%)	NS
関節関連症状	52 (5.2%)	66 (3	3.7%)	< 0.05
頭痛	49 (4.9%)	51 (2.8%)	<0.0	005
肝機能障害	25 (2.5%)	140 (7.7%)	0.000
胃腸症状・腹痛	i 20 (2.0%	21(1	1.2%)	NS
嘔気・嘔吐	35 (3.5%	40 (2	2.2%)	< 0.05

FACT: Febuxostat Versus Allopurinol Control Trial in Subjects With Gout

APEX: Allopurinol- and Placebo - Controlled, Efficacy Study of Febuxostat

CONFIRM: A Phase 3, Rondomized, Multicenter, Double-Blind, Allopurinol – Controlled Study Assesing the Efficacy and Safety of Oral Febuxostat in Subjects With Gout

参考文献

1. Reginato AJ. Gout and other crystal arthropaties. in: Kasper DL, Fauci AS, Longo DL,

Braunwald E, Hauser SL, Jameson JL. Harrison's Principles of Internal Medicine. $16^{\rm th}$ Edition. New York, McGraw Hill co. 2005: 2046-2050.

- 2. Wortmann RL, Kelley WN. Crystal associated synovitis. In: Ruddy S, Harris ED, Sledge CB. Kelley's Textbook of Rheumatology. Sixth Edition. Philadelphia. WB Saunders Company 2001: 1339-1347.
- 3. Terkeltaub RA. Gout. New Engl J Med 2003; 349(17): 1647-1655.
- 4. Fam AG. Should patients with interval gout be treated with urate lowering drugs? J Rheumatol 1995; 22(9): 1621-1623.
- 5. Borstad GC, Bryant LR, Abel MP, et al. Colchicine for prophylaxis of acute flares when initiating allopurinol for chronic gouty arthritis. J Rheumatol 2004; 31(12): 2429-2432.
- 6. Karimzadeh H, Nazari J, Mottaghi P, et al. Different duration of colchicines for preventing recurrence of gouty arthritis. J Res Med Sci 2006; 11(2): 104-107.
- 7. Wortmann RL, MacDonald PA, Hunt B, et al. Effect of prophylaxis on gout flares after the initiation of urate-lowering therapy: analysis of data from three phase III trials. Clin Ther 2010; 32(14): 2386-2397.

GOUT-GL-CQ06:【急性痛風】⑥

CQ:痛風発作が頻発する患者において、コルヒチンカバーを長期間使用することは短期間使用することに比して推奨できるか?

① クリニカルクエスチョンの検索に重要なキーワードの英語並びに日本語コルヒチン(colchicine)、副作用 (adverse effect)、生活の質 (QOL)、尿酸降下薬治療 (urate lowering therapy)、痛風発作予防 (prophylaxis for gout flare)

② 代表的な既知文献リスト

- 1) Borstad GC et al, Colchicine for prophylaxis of acute flares when initiating allopurinol for chronic gouty arthritis. J Rheumatol 31:2429-2432, 2004.
- 2) Paulus HE et al, Prophylactic therapy of intercritical gout. A placebo-controlled study of probenecid-treated patients. Arthritis Rheum 17: 609-614,1974.
- 3) Feng X et al, Prophylaxis on gout flares after the initiation of urate-lowering therapy: a retrospective research. Int J Clin Exp Med 8: 21460-21465, 2016.
- 4) Schlesinger N et al. Gout prophylaxis evaluated according to the 2012 American College Rheumatology guidelines; Analysis for the CORRONA gout registry. J Rheumatol 43: 924-930, 2016.
- 5) Wilson L and Saseen JJ. Gouty Arthritis: A Review of Acute Management and Prevention. Pharmacotherapy 36(8): 906-22, 2016.

[推奨文草案]

1. CO-6

高尿酸血症治療中の痛風発作の予防のためのコルヒチンの長期投与は短期投与に比して推 奨できるか?

2. 推奨草案

コルヒチンの長期投与は短期投与に比して、発作回数を有意に軽減するが、OOLの改善に ついては明らかではなく、一方、有害事象としての肝機能障害の頻度も高くなるため、肝 機能など有害事象に留意して投与することを提案する。

3. 本COに対する推奨の作成に当たっては、発作回数を減少させる、OOLの改善、有害事 象としての肝機能障害の頻度を重要視した。

COに対して提示されたアウトカムの中で、この推奨の作成に当たっては、痛風発作回数の 減少、有害事象の回避を重要視した。

4. COに対するエビデンスの総括(重大なアウトカム全般に関する全体的なエビデンスの

A(強)

B (中) ○C(弱)

D(非常に弱い)

推奨の強さを決定するための評価項目(下記の項目について総合して判定する)

推奨の強さの決定に影響する要因

説明

アウトカム全般に関する全体的なエビデンス が強い

- ・全体的なエビデンスが強いほど推奨度は 「強い」とされる可能性が高くなる。
- ・逆に全体的なエビデンスが弱いほど、推奨 度は「弱い」とされる可能性が高くなる。

痛風発作の予防のためのコルヒチンの長期投 与と短期投与を比較したエビデンスはわずか しか収集されなかった。そのため、さらに多 くのRCTによるエビデンスの集積が必要であ る。

益と害のバランスが確実(コストは含まず)

- ・望ましい効果と望ましくない効果の差が大きけ れば大きいほど、推奨度が強くなる可能性が高 い。
- ・正味の益が小さければ小さいほど、有害事象が 大きいほど、益の確実性が減じられ、推奨度が 「弱い」とされる可能性が高くなる。

3つのRCTをまとめたpost hoc解析とバイア スリスクの高いRCTによると、益(痛風発作 回数の軽減)はコルヒチンの長期投与で有意 にみられた。一方、有害事象全般では、コル ヒチンの長期投与と短期投与で有意な差は認 められなかったが、肝機能障害に関しては、 コルヒチンの長期投与で有意に高頻度となっ た。しかしながら、本CQに関するRCT数が あまりにも少なかったため、益や害の大きさ の判断は不十分である。

推奨の強さに考慮すべき要因

患者の価値観や好み、負担の確実さ(あるいは相違)

正味の利益がコストや資源に十分に見合ったものかどうかなど

コルヒチンの薬剤費は3か月で930円、6か月では1860円となり、6か月投与しても大きな経済多的負担にはならない。

明らかに判定が当てはまる場合「はい」とし、それ以外は、どちらとも言えないを含め「いいえ」とする